

亀田 誠治（かめだ・せいじ）先生

音楽プロデューサー

1964年、アメリカ、ニューヨーク生まれ。辰年。

1989年、アレンジャー、プロデューサー、ベースプレイヤーとして活動を始める。椎名林檎、平井堅、スピッツをはじめ、

DoAs Infinity、スガシカオ、Chara、アンジェラ・アキ、秦基博、エレファントカシマシ、JUJU、チャットモンチー、フジファブリック、

NICO Touches the Walls、のあのわ、WEAVER、などの

プロデュース&アレンジを手がけている。

2004年夏から椎名林檎らと東京事変を結成。



「誠屋」公式 HP <http://www.ganso-makotoya.com/>

公式ブログ「亀の漫遊記」更新中 <http://www.ganso-makotoya.com/blog/>

【参考になるHP】

社会法人全国コンサートツアー事業者協会 <http://www.acpc.or.jp/>

一般社団法人日本レコード協会 <http://www.riaj.or.jp/>

《講義概要》

音楽プロデューサー、ベースプレイヤーとして数多くのアーティストをプロデュースしている有限会社誠屋代表の亀田誠治氏が、デジタル技術の進歩が音楽産業や音楽制作に与える影響について講義を行った。

講義では、デジタル化により音楽の制作者や音楽業界全体が受けている良い影響について、音楽制作の裏話なども交えながら具体的に解説した。デジタル化やネットの普及は様々な問題を抱えているが、音楽制作やライブ活動等に積極的にデジタル技術を活用することで、ものづくりが向上している実情を示し、「デジタルとの上手な付き合い方が重要」であることや、「デジタルと人との距離感の大切さ」について学生に強く訴えた。

さらに、どれだけデジタル技術が発展しても「最後は人次第」であり、「人由来の感性、人肌の温度感を大事にしている」ことを伝え、人とのつながりを大切にする亀田氏の数々の言葉から、人生において大切な考え方を学生は学んだ。

## 《受講生の感想》

●音楽の創り手の方の生の声が聞けて、デジタル化に対する考えが変わる機会になりました。配信や利用方法の問題でネガティブな側面が大半で、それを規制したり改善する法や制度の整備が急務であると考えていましたが、技術のスピードと共に創り手も良い環境におかれていることを知り、自分たちは問題の側面しか見ておらず、技術を敵だと捉えていたように感じました。多様な音楽が手に入る、耳にすることができるようになった環境を私たちも上手に利用し、その付き合い方を守っていけば、どの側面からも発展できるものだ改めて気付きました。

立命館大学・法学部・4回生

●先生が何度も「バランス」という言葉を使っていたように、どちらかに偏って物事を考えるのではなく、それぞれのポジティブな面を上手に組み合わせることが本当に大事であるし、相互作用により、よりハイクオリティなものを生み出していける、その可能性を拡げることが大切なのではないかと思いました。

立命館大学・映像学部・3回生

●“最後はやっぱり人”であり、人間を信頼して制作活動をされている姿勢がとても印象的でした。デジタルばかりでは無機質になってしまい、アナログのままでは効率が悪いという二つの間で上手くバランスを取られている考え方がとても素敵であり、参考にさせていただこうと思いました。

立命館大学・産業社会学部・1回生

●デジタルが円滑なコミュニケーションを促進したり、作業を効率化したりといったポジティブな面について学ぶことができました。作品作りにおいて全てをデジタルに任せるのではなく、「最終的には人間の感性、人肌の温度感を加えることが重要である」というお話しがとても印象に残りました。この考え方は作品作りにおいてだけではなく、今後私たちがデジタルとより良く付き合っていく上で大切なことだと思いました。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●「デジタルは距離を縮める」というお話は、アーティストならではのご意見を聞くことができ新鮮でした。デジタルによって曲作りなどのやりとりが簡単になるとともに、曲ができた時の気持ち、熱、テンションをそのまま伝える・共有することができるということはアーティストの方々にとって素晴らしいことであることがよく分かりました。

立命館大学・映像学部・3回生

●デジタル化によってコンサート会場の音が良くなったことやライブ準備がスムーズになったことが分かりました。また、My Space や You Tube 等は著作権の問題に注目されがちですが、音楽を世界の多くの人に向けて発表できるツールとして、チャンスが拡大するプラスの面があるということに驚きました。

立命館大学・映像学部・2回生

